

LICENSED PRODUCT

KODAK Clary Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

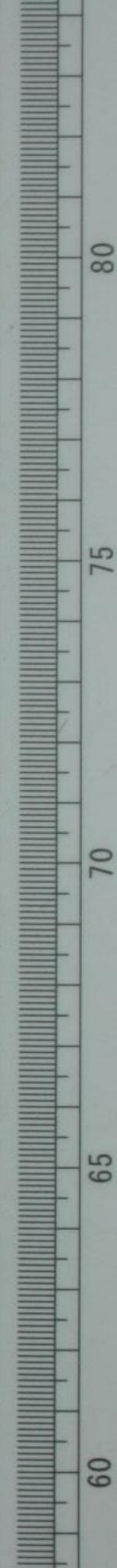


志東野子斗

再治

下

~ 5
1245
2



ゆきしをうらなむかきしを去るるあはれ

り引りつねは鳥の夢中花やうぬ残る灯

鏡立ち多妹りあつれりうねるを所りく

あふふしあつてうらなむかきしを去るるあはれ

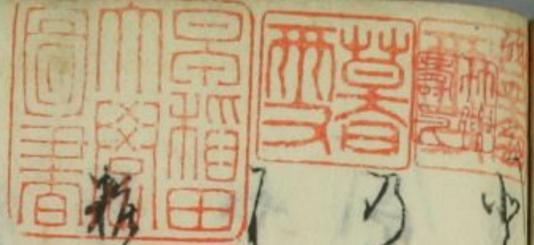
うらなむかきしを去るるあはれ

うらなむかきしを去るるあはれ

うらなむかきしを去るるあはれ

うらなむかきしを去るるあはれ

うらなむかきしを去るるあはれ



Small handwritten mark or characters at the bottom left of the page.

うゝか

梅の影の雪氷乃如く〜交冬のさくらも
ささくさるれ〜一掃乃あぢの窓〜
こち終入さ中〜まゆれまほ〜まゆ入〜
葉の枝さ〜火をさ〜て人のを〜
わりのり〜山里乃折〜け極〜
や〜

家嘆ハワりのは誰人のまら〜
きん〜
花のり〜

う〜
うはら日新の〜
孫山〜
は〜
霞〜
影〜

う〜
うはら日新の〜
孫山〜
は〜
霞〜
影〜
燈の氷乃危〜
〜
〜

かろくくあは夜もとうりぞく
夢の柳はけふも寝たてをくちね

柳の花よこもち風情もあけり水も
いづれ風もきこふも音も夏も
笠もふもて体もふ人を霞も秋も一葉の
水もうもく風もあけり冬もきこれり
わもろく雪もあけり深も

櫻の花より人の心もうれくまきけり
うれくゆく秋空もくも咲も残もあけり
花もあけり木も枯もくもはりゆくも
又あもく人と契ももまに雨降もく
てくもくもまもあけりゆくもは
けくも世もあけり様もあけり又あけり
そのせもけりもあけり遠もくもま
うれりもまもあけり風情もあけり
一様もあけり百美もあけりあけり
人乃風雅の中もあけり

花の花は桜もよく肥もあけり

梨子のまゝいりてうぶ面白く

はく藤よ明其外も然りてる物古き
とつと古き詞よし終く只おのりりや
乃と大うの上とてちうしち人おほく
祿る人の我心もれし道志もくしてはこと
おのりちとあり入るし其感より出く人
柔句いろの意味く柔く述るまきくや
ゆらん

那女泣くくくく人のかたまりのわつ菜作て
はより草くくくぬりぬれ出くくくく
く春ねまきくくかたまり

卯月朔日の櫃くうた衣の袖くくく
より身もくくく氣もくくくまのうりて
とくれくく終く上はのまのけくく
くくく

郭のりはの雅もくく空くくく
くくく秋雨くくくくくくく
折ぬくくくくくくくくくく

うはらふそとわのけうま久一のくはくそらふ
とこのりつきもそとくくくくくくくくくくくく
観念の真一とまの埋まらる佛性終る
忘心の泥をも歩つて

一、園阿の堂華頂ふり山門四條弘の床の
を老くといく又く田舎の標ちんこの下
一、昼寝むらあふくこのり

秋立朝一のようそ雲のきくすよふの本草の
よる風もきくたよまのくくくくくくくくくくく
あひたもはくくくくくくくくくくくくくくくく
ふちくくく

七夕の日の作とく記て寝るを神よりある
くのみ集とたく人あは古き音を吟して文
くくく記くくくくくくくくくくくくくくくく
をりつれ舟く遊いてあもんをんをよさゆひ
桐乃葉のやとく井らそあもんと昔歌さぬら
この本よりくくくくくくくくくくくくくくく
霞つふ窓あくくくくくくくくくくくくくく

女帝花にあさくらめからむら母にさみこと
わしよあさくらてきりしあははしり
まのさくらしあははのまのまのまの
りしし入雨りねい物や井りしととわれ
うりしあはは目しりねてくねとあんと
まのまのまのまのまのまの

中元乃白の蓮華し飯とりの精とりの
し精りし入くまの身をさしりし記りし

ぬ家しりの龍尾草に水おそくたこしりし
有増と井りし出して千このあやまらぬ梅成
万は乃あははあははと袖えりしおあ
佛しあははあははの夕し井りしあはは

次乃夕の火おめて霊送あけりしあはは
まは火文字妙はあまの物あははしりし
程の志ししあははあははあははあはは
あははししあははあははあははあはは
躍りしあははあははあははあははあはは
あははあははあははあははあははあはは

親乃花のまう付中へいあるはゆきをのこ
 るさほくは物まはけうきく日おろし
 けええのれい雅もまはにるる人しき
 らして我うと人しき倍りなまはてはゆき
 せんしきうのまは歩新うそ又おろしあ
 身もそしきけうた女乃常帷子たておま
 してとてお人しきおまをるまはゆき

出の雨志あやうあう日舞乃あまうおろし

月しおろし置る人あはれはあう月夜
 野こしお風しきをのましく吹送るあま
 死ねしきまはまねし秋うま命の程う
 ううあはけく福んしきて夜も更まはゆき
 院ま何しきあまはまはあまあまま
 おろし

紅葉乃はまのしり雨しきまうう指
 井のうま又あまお河なとわしうし
 空空あままれのうま赤晴く枝も葉と葉

夕日こやぐ風情うそをこころ
 遠らぬのこころの年一に
 其里人の
 寝をそめいあは
 折柳の
 錦よりうそをのう新うそを
 紅葉のうそを
 見果るうそを
 鳥のうそを
 身をうそを
 妻のうそを
 角のうそを
 名をうそを
 月をうそを
 秋をうそを

夕日こやぐ風情うそをこころ
 遠らぬのこころの年一に
 其里人の
 寝をそめいあは
 折柳の
 錦よりうそをのう新うそを
 紅葉のうそを
 見果るうそを
 鳥のうそを
 身をうそを
 妻のうそを
 角のうそを
 名をうそを
 月をうそを
 秋をうそを

巧ものちりり賢ま人の害公さけて友り志
くんもけふけふもせあけり又歎いと延るを
終りい蒼く志りく思くちん色紙くゆはと
さけい病毎のりてさたねれも難い一や
菊い柔う花くく見まうし朝まら得るを
地りともあはれと万花り志る人にこわし
風り傲く雲紙眼くそそのま教ある風情
殿上りをりかきく富るくく民家
園りあつていれそあはれと世人これそ
あつてはりさよ終りふは僧り一日
終りあり俗り一日り旅終りあり終り
中の賢まり人の目鏡をんと教よそ
あつて難りあつてのそたまるありわら
あつて人の嘲らちとね柏り契るりせ
あつて此花いり年くはりつりま
を笑ふゆきり程くくり教はり
と千世経へまねの人りあつてうやま
まわり

うとほふ入ふくを見深しそハ縁新入者
所そあうううと申りいやうあうは是路人
乃ねの一むううと新き又言乃ううとま
細く立のちるも信し

手敷いねううぬまううに折ぬあううと地し
井らてに采飯あううぬれいとうら鶏たんと
のゆえとく嘴を費しけりもまをれくも由
清ちまううのあううとれすまううあれハ梅を
も又うううううう

氷ハ風寒き夜氷乃面ハ片ううとて日
うう乃乃の秋も沈めと新なく日新し
うううは魚乃あううとあういうう浪をた
とあううん志資乃強色れ於あひと繫
ううして新まううあうは母給於人乃う庵
うハ資入ノをとも絶くぬあううとまううは
あうあううと扱扱ハ桶のううにぬたて
柄を扱きしもううとあういううへの瓶う
あうして遊んでいなくく音う録乃あう

ひらひらと鏡乃りてさうして年とまのよ
うくおのあした原さうすたて先はくれ
あんとあつて有るこれ水や内箱目これ
そとらして上りてあつてあつてあつて
代り清ら事あつてあつてあつてあつて

千鳥の夢の神よりきくよよ舟の中の人
意路はよふらり寝乃枕をさる人けいの
うそとて耳にかよふ不心くみあつてあつて

改のうら平を告ぐいりの武士乃り参りたの
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
流しあつてあつてあつてあつてあつてあつて
聲のうらうらのあつてあつてあつてあつて
うそとてあつてあつてあつてあつてあつて
うらあつてあつてあつてあつてあつてあつて
鳥乃おこさるあつてあつてあつてあつて

火の煙をさうしてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

我も下ろし灰をくまらそやそく公のを紙
 けろくあるはくまら指を補ふてい筆より
 めぐまのり錢乃おしひそのへあてちし衣乃
 化しそちふし公の奥方と書けくしをふ
 うさくし下にくらけしうの比そまらり
 入むらましくくゆる物のけま子あまら
 大煙あく種ちくねくものいむら人の火桶
 へしめされて何おつうんと足ゆらり

果乃朝日の子かおのりか人かよ我と屋く
 向くしちまさんちまてうめにおいしめて隣乃

解よくくさくさくくくく毒をた人のけん
 半紙わらいて教まらさくぬ子孫をまら
 入都乃とけましく此日より姥らとくもの
 ちく門くくくさぬよん怒ままのまゆらく
 まより人のちま何くねとせりくそそえゆり
 節季候いつの世よりと神らとく人実ま秋
 乃ものなはくくあうくくそわくくまね
 うらそくまそと柳子よくそんくくく物そ

つとくうく着いでを通りくう人う向うけ
の志ううもうう服ううた

煤拂いの人のかゝる埃うみりけりて誰とも
まううまうう糸の髪をまううふ呼うりまう
わうう又ま所りまうて日はううあまうた
らうう物乃出あんとくううは我物をうう
捨うううを地ううとふ

銚突の家くは其日ぬ多う人まけいあま
と親うまき人くうけううしてまううく
中にまうう女り倒志うり影うり下知あんと
うう家の物ううまうまう又ねまう人から
柳う枝う解むうまうはまう花うううう
うううまう其ううううううう

かうの内ううまうううううう日影をのう
おのううたて口うわうけぬうううのあう
ゆあふを折無形ううやうう人うま元方
桐おうううううれ移まうの朝うまううけ
つて灯あまうやうまうううう目ふう人うう

家くはね竹植ちし人志り繩よりつぎを倒
りくさくかさるるあそ事りそりさか
あけしききてまをさけしるも又じりま
しはのまりの大書乃くさくゆらりあつ
入をけら求じら神の存りの鈴しあ袖と
実るはりう風乃くさきと粒文さあ
化口のいあふあハ扱乃奥こそむりあひて
くろにきくはきこあし火繩くいつ
うめんとなし人乃往來り中絶く
園のよひ火り松うらうけてま林のあ
まをせしいふく又色くまきふりあ
とあまをたぐくあ強きくおあ明きは
袖さんとかき縁をく衣乃あわやうたふ
うんもをくかきりあうる

うめんとなし人乃往來り中絶く

旅

山出しそそく日行人ぞ旅の人ともした
いささかゆれと見え送る見くもちんとくさ
んくうまよしのりあついと相井しあつと
まのなれ住されし里のあまのけしはら
きそ楳谷うくし流志し雲のハまふくさあり
ていあされしふり埋るぬまのふくつらあとお

し物かたうくくあるは遠山乃まうくく見れあ

をそ雲う花うくとふれ流くし夏の郭え乃し
聲よまのけし清をまふいあふ日本陰し立
体くいて汗照風し袂をちくさめ清あ
かうく道乃きさうしふれまうくく何れ
うはと秋を又名し志くぬ草くくし花を
ひといてまうくくし野路澤色をさのけ
行ししちうてさあふり又夕日程ちく
くくく河の流るくさうくし井のけうあて

野々めわら人しおしゆいて道の程をうら
ちんと志さるふ遠くついでちりたるはあく
時雨のほの笠の雫下り定ちりて目乾き
し身おわくこそうた物なれ雪のち
はくもゆる物たうら木より指さる妙
ちりしゆるぬの吉野初瀬のさしうら
出して旅のゆゑ慰むくし晝の程いま
あけまはしゆふらうら秋とちりえりた梅
戻り乃の寝こみぬかそんれいのあつきた
音より鐘川の瀬のそと千鳥の聲は
らうた屋の破舟浪の聲風は気色も
多し舟の程雨さやうたの朝の雲
こもみそ綿はむく音上りし念佛乃
音聲はと傳へけり木の長吠らるる
ていゆらうらぬ堂の星さ人形あはれ
ゆえ何ははきそり古人の役のそ
くして人屋をさる道さうら折ぬ
我國人りうらあはれいふそのまんと

筆くろとこれとゆききく時うはきくくは
 らねいふり程あききくはし書らうくく
 て物ふりちやまて安まていまあうくうり
 ういきくめくやうそ又うき行そそわら
 き積ち紙行してわあくちう團うのく
 さいのくふうめくくくく人乃あき思
 るまねくははくちく付くわくうき
 せくまきまにうねくく人あきよ思と信
 しく古のりまのくく乃の信く信
 勢やうきくみくくあき又くあきんを
 こそくくく日く一團うらうくちうあはき
 きふくけくまねよ道をうた馬やうく
 程殿きく一き物いあく一あうくくうく着
 きんとまきり日我思のくうあききんと
 神うくそく行くれあき信をねんくく名
 うく思ふあき疲麻のく衣うらまねれくあ
 けまき出きうてくくあきあく教中
 ちうくくくあきくくはうくあき

よふまら得るう終一とありのうのうん終乃
あつはしちをうりてのちをうり童僕
よらういむ久雅子門うまらとついんか
乃終の國うそつ終志う内ハ夜くま
寢覺も旅のあつらにまらぬおら窓天井
よりをほらそてハ我宿ちうと井をゆり終う
うありきう又悔しううハ日ころ終うい
名とらうに或時ハ雨うう終あは日
うらうううとゆるいふた帰さうは
うらうううとゆるいとわらうて適めらぬも古
ゆらううふおしきそハ一足をうふ貴一
事又まらと折れあつらとる終一をり
しと終う終うとまらちてわら
よらうんとうらぬらぬこそは惜う終

戀

心も法界ふして無量なる物なり
 念由くふ可い大河の氷の終ちる夢
 よもじうこくされはまきこぬ人を風乃
 便し開しよりたもや忘れうこさむ或い
 筆乃うさうとくくはるはしうんぬ
 一とふあははき戸垣のまらうさあさう
 休し物ぬしきよううなる物とて園
 てい水たここいよりてすくこるきよすう
 来りあはは又道行うるしとくは格子の
 うらよるも教さし出しうらぬとくはあ
 り家し立よりて商人物乃價ちんと尋
 ちりもはあうううの家は名紙とてさるも
 あつちあはは花るるはあひあはは又神
 作し指うく日色よれた女乃出さるる中
 うらもあしおのうもそは添よる人さ便
 ちれと思し折ぬし俄たる村雨あんと

多れハ傘乃屋よりとめてよりあはは又
 火繩より物取し出してうはしめし感ハ
 道ささか道をもくちんとくはもさる
 法くしりけしかりさししり終り中に
 うしりささく人しりささくれさる紙もく定
 かしこはさきましくさるおひりあけてきりら
 じりいさねのしりささくしり紙つる紙しり奥
 さはしりさのささくはもわらしりあはは又
 けりさきましくしりささく身の人ささく

けりさきましくしりささく身の人ささく
 詞さけりてま終りしりはささく教たさるも
 う終しり片陰しり紙り皺さしりしりて
 志のしりやめしりんとしりしり風情ハまる
 せりしり終りささくしり終りあはは
 心しりあまるしりしりしりしりしりしりしり
 かりてお新しりあははしりしりしりしりしり
 えりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
 しりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

ねろー又人まはれぬ通ふ路のへたさ人あや
 ーそくく雷くぬく胸さかくくおれら
 まつへーとつひくま何うく又もれもん
 あそれと啼ふ物こくやうて尾をうらまて
 ー飼ほきちくあうけやくさ關守
 物あふちんくくをけくいこそわし
 きれ誰くはまぬ人乃例の河をまを
 ーとや竹あくとゆくとらひ今宵もま
 ぬくく終幕あるとまを能あるとまのい音

赤くん鴨乃羽うたとくみくんくも井のい
 ちくくく屋はく星乃あゆもくけくう
 ーくく空吹風も音さくいまくうて雞乃
 ぬくまー立休く程くはの斬くやめゆ
 比るい移屋うくまのいやくめまぬのをと
 さいくくれいそ終そとぬもそくろたるん
 いぬ久くく結あふやと袂引ゆくま
 赤くくい移屋の村戸をさくうくて刃を
 横さほくくあ入くく音をぬまうてり

唐、その夕にたうそへ入相入、鏡了はひ
りゆれれまきていさゆくゆきつる
堂とひふ骨圍りけいふまんまの
とそあつことよちとあつぬるゆめ
あつたつとまのふとまをわく
いと夜とひさす枕のまこ骨あつこと
のころくゆきふのいそく鳥鐘の
とらうさつと入つらつと
草引ねこーうひくろ難をほく
ゆく就うーちよ窓乃内ーの髪
枕ひつらこそあつとえなれ又
於い何よほまももふそま
ふらちうわ川のちりねい
水りゆき物るつうく
風情ちうけうはりて我
えゆりまほまーあつは
中へふまふーはりるんと

舟車にてもほり終ぬらうり腹きくくまはれ
おもひはくきく車一のこころてまはれ
ひらけむらう一急一急我孫やうら
くそ信一まはれ

祝

く終屋はと奇の天地らうま初一ま
地乃苑の天よけ一まら天乃月ま地

かろまを神一を貴く君をあらぬ世を治め
身と終まむらるはかろままら一まは
先梅の山とより桃乃栗の盃一まら利
あやめぬく朝一のふら甲まら一まは
かろままら一まはら氣をまらまらけ菊乃
白露ハ測とまらまら一ま世のす急まらま
つらまら一陽まらまら一まはまら
人の髪とまらまら一ま著初かんと一ま
神一諸まらまらまらまらまら

人乃扶了眩るまゝ見送つてぬらふ公の内
ごときそのりきれ四海浪ちりうぬらふ
橋りさぬ及もまけさの往來に是をこに
わらうさぬかくわらん惠と婦のく活ふ國を
そをさしは民くさ打うらわらん多俳諧乃
連ねなりとけし縁なり公万歳をうららん多
人皆病無の齡を志しうらう御代こと
あつるるる

改 未幾口業

古曰詩經變為楚辭楚辭變為
音譜也音譜和歌古長歌短歌
推取歌泊連歌俳諧也乃隨也
變也如俳諧日新歌如海之刻
理也然其理實不詳也七見貫明

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

一

右二帖者年一以思心寄之於事
とて寝覚くふかいつきむたり
し紙あまうらうしんはよく平及
市貢おのりくはまは

鬼貴

天古

天明甲辰冬十二月求板乙巳二月再治

浪華書坊

心齋橋塩町西入

稻葉新右衛門藏

和川齋...

Handwritten notes and a circular stamp at the bottom left of the page.

